

説教 『旅を続ける恵みの発見』山本 護 牧師

聖書 出エジプト記 16:15~18/コリントの信徒への手紙二 12:8~10

パウロには辛い持病があったらしく(Ⅱコリント 12:7、ガラテヤ 4:13)、これを「サタンから送られた使い」と表現した。彼は「この使いについて、離れ去らせてくださるよう三度願った(12:8)」が願い通りにはならず、神は「わたしの恵みはあなたに十分である(12:9)」と答えた。パウロは当初、宿痾の辛さに心身が囚われ、「十分な恵み」に気づけなかった。そして自らを省み、病それ自体が「サタンの使い」なのではなく、人間を拘束して恵みの事実から遠ざける作用のことを、そう呼んだ。

神は「十分な恵み」に続けて「力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ(12:9)」と言った。するとパウロの視点は「三度主に願っていた」過去から、「キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇ろう(12:9b)」という未来へ転換する。これから恵みが「与えられる」のではなく、恵みはすでに「与えられている」。恵みは、「今」の私を転換させ、ここから「未来」が開かれる。恵みを発見する時、状況は何も変わらないのに、否定的な弱さが肯定的な力となる。

空腹と恐れによって、民の心身は不安・不平というサタンに囚われていた(出エジプト 16:3)。神はこの民のためにパンを与える約束をする(16:4)。「蜜の入ったウェハースのような味がする」パン「マナ」という名(16:31)の由来は、「アン・フーン」あるいは「マナ・ホワ」。この言葉の意味は「これは一体何だろう(16:15a)」。マナは旅を続けるための命のパンである。しかし、超常現象として天から降って来たものではあるまい。「マナ・ホワ、彼らはそれが何であるか知らなかったからである(16:15a)」。おそらくマナは以前から周囲にあった。しかし「これこそ、主があなたたちに食物として与えられたパンである(16:15b)」というモーセの言葉を聞くまで、それが「パン=食物」だとは気づけなかった。主の恵みの御手が働く時、そこに新しい地平が開かれる。民の出立は、「マナ・ホワ=これは一体何だ」という驚き、畏れ、謎から始まる。恵み、驚き、畏れ、謎。私たちにおいても同じではないのか。

旅を続け、生きるための恵みは誰にも、十分に与えられる(16:16~18)。モーセは「パン(富)」の占有を固く禁じたが(16:19)、抜け駆けして多く集める者がいた(16:20)。この貪欲が現代のグローバル経済を成り立たせている。貪欲は富の占有を讃え、マナの分かち合いを破壊し、戦争と飢餓と人間疎外を世界各地に引き起こす。今や日本においては生活保護者が増加し、餓死者も珍しくない。毎日膨大な食糧ゴミが出ているのに餓死者が少なくないのだ。なんという狂気か。際限のない貪欲が猛威をふるい、虚無が世界中を覆っている。サタンに騙されてはならない。恵みは無償で十分に与えられる。

十分に与えられるマナの恵みを自覚する者は、脅えという罠に囚われない。どんな状況でも、不平や不満に占拠されることはない。「わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足している(Ⅱコリント 12:10)」。心身が神の恵みとキリストの力に満たされるなら(12:9)、貪欲とサタンは暴れまわることがない。「わたしは弱いときにこそ強い(12:10)」。逆説的な言いまわしだが、パウロの実感そのもの、そこに起こっている現実そのものを語っているのだ。



【おまけのひとこと】

魚屋の店先の鳥賊 こりゃ旨そうだ アジアのバザールには 樽に山盛りのコオロギやタガメ

民はモーセの言葉でマナの蜜を知った 恵みのマナは世に満ちている 気づかぬとはもったいない